

中国語の反義並列型二音節語の構造

守 屋 宏 則

0 序言

英語では right and left と言う。日本語では「みぎひだり」と言う（漢語ならば「左右」）。中国語では“左右”と言う。この順序は固定 (freeze) されていて、* left and right と言わず、「* ひだりみぎ」と言わず、“* 右左”と言わない。それはなぜか。この問いについて、英語については一つの解答が提案されていて、それによると「英語では意味的に右が左に優先する」という意味上の原則があると言う。¹⁾ 本稿は中国語の“左右”のような二つの反義形態素からなる二音節複合語において、形態素の配列順序にどのような規則性があるか、規則性があるとすればその要因は何か、を探ることをその目的とする。

なお印刷の都合により、中国語部分も簡体字、繁体字を使用せず、一部を除き日本字を使用している。“ ” で括られた部分は中国語であると承知されたい。

1 AB の順序を決定する意味的要因

上に提示した問題について、次に紹介する三つの主要な先行研究のうち、二つの研究はそれぞれの反義成分のもつ意味にまずその要因を求めようとする。

例えば英語では、warm と cold という二つの形容詞が並列する場合、ほとんど必ず warm or cold のように warm が先で cold が後という順序になり、* cold or warm のような順序にはならない。その理由については、W.E.Cooper と J.R. Ross の研究

によって結合の順序に次のような意味的制限があることが指摘されている。²⁾

- 1) Here : here and there
- 2) Now : now and then
- 3) Present Generation : father and grandfather
- 4) Adult : man and boy
- 5) Male : man and woman
- 6) Positive : positive or negative
- 7) Singular : singular and plural
- 8) Patriotic : cowboys and Indians
- 9) Animate : people and things
- 10) Friendly : friend or foe
- 11) Solid : land and sea
- 12) Front : front and back
- 13) Agentive : agent and patient
- 14) Power Source : bow and arrow
- 15) Living : living or dead
- 16) At home : Aeronautics and Astronautics
- 17) General : form and substance
- 18) Nominal : nouns and verbs.
- 19) The Food and Drink Hierarchy : fish and game

(例は一部のみ)

この研究に触発されて、湯廷池は中国語の“大小、出入”のような「反義並列構造」(antonymous coordinate construction) について分析を行い、“大小、多少、長短……”のような正反両義の形容詞が並列してできる度量衡を表す抽象名詞は、形態素の配列順序にある共通の特徴があり、すなわち、積極的なプラスの意味の形容詞は前に現れ、消極的なマイナスの意味の形容詞は後に現れる、という原則があることを指摘している。³⁾ さらにこのような反義並列構造に関する意味的制限のみな

らず、中国語の並列構造の語彙は、以下のような意味的制限を受けると述べている。⁴⁾

- 1) “天” —— “人”：“天地人、順天応人” など
- 2) “人” —— “獸”：“人馬、人面獸心” など
- 3) “公” —— “私”：“公私、軍民” など
- 4) “家” —— “人”：“家人、孤家寡人” など
- 5) “長” —— “幼”：“長幼有序、老小” など
- 6) “尊” —— “卑”：“尊卑、主僕” など
- 7) “親” —— “疎”：“親疎、親友” など
- 8) “男” —— “女”：“男女、父母” など
- 9) “優” —— “劣”：“優劣、好壞” など
- 10) “盈” —— “虧”：“盈虧、胖瘦” など
- 11) “主” —— “副”：“主副、本末” など
- 12) “鳥” —— “獸”：“禽獸、鷄犬不寧” など
- 13) “上” —— “下”：“上下、高低” など
- 14) “軟” —— “硬”：“軟硬、虚実” など
- 15) “裏” —— “外”：“裏外、内外” など

(例は湯廷池が挙げているもののごく一部である)

挙げられている例についての問題点の検討は第2節で行う。

もう一つはこの問題に関する最も新しい研究である譚達人の考察である。⁵⁾ 譚達人は一組の単音節反義語が結びついて一つの新しい語を構成しているものを“反義相成詞”と名づけ、“反義相成詞”の構成成分A、Bの配列は“義序”と“調序”の支配を受けると述べており、この問題を解く鍵として声調を考慮に入れている点が湯廷池と異なるところであるが、譚の主張の問題点については次節で検討する。

以上のような先行研究の成果をふまえた上で、本稿では考察の対象を現代中国語の形態素Aと形態素Bが反義であるところの二音節語（以下これを「反義並列型二音節語」と呼ぶ）に限定し、AとBの順序の規則性および順序決定に関与し

ていると思われる要因について改めて調査と分析を行う。材料は『常用構詞字典』⁶⁾からその大部分を抽出し、若干をその他の資料から補った。⁷⁾

調査と分析の結果、多くの反義並列型二音節語の形態素 AB にはそれぞれ次のような意味的な特徴があることが再確認された。

前のAは、積極的な、プラスの、好ましい意味である。
 後のBは、消極的な、マイナスの、悪しき意味である。

上のような意味的特徴をもつ例を一覧表にして示す。

表一

↓	愛憎	公私	前後	是否
	安危	官民	強弱	先後
	表裏	官私	親疎	香臭
	長短	貴賤	取捨	詳略
	成敗	好呆	日夜	新陳
	粗細	好壞	榮枯	興亡
	存亡	紅白	榮辱	優劣
	大小	厚薄	山谷	有無
	得失	吉凶	善惡	遠近
	動静	進退	賞罰	早晚
	多寡	開闕	上下	増減
	多少	快慢	深淺	張弛
	恩仇	寬窄	伸縮	漲落
	肥瘦	利害	昇降	朝夕
	浮沈	明暗	勝敗	真仮
	俯仰	男女	勝負	正負
	甘苦	濃淡	盛衰	中外

剛柔	胖瘦	施受	主客
高低	平仄	始終	
攻守	起落	是非	

しかし、この傾向と反対の特徴をもつ例、すなわちAが消極的な、マイナスの、悪しき意味を表すもので、Bが積極的な、プラスの、好ましい意味を表すものである語も少なくない。また、A、Bのどちらが{積極的/消極的}か、{プラス/マイナス}か、{好ましい/悪しき}かを判定するのが難しい語も少なくない。

まず前者の例を一覧表にして示す。

表二

↓	遅早	冷熱	疎密	虚実
	反正	難易	輸贏	損益
	寒熱	軽重	死活	
	禍福	曲直	松緊	
	冷暖	叔伯	稀密	

次に後者の例を一覧表にして示す。

表三

↓	凹凸	旱澇	買売	吞吐
	彼此	黒白	矛盾	文武
	賓主	呼吸	南北	問答/答問
	出納	緩急	内外	鹹淡
	出入	横縦	偏正	陰陽
	雌雄	借貸	巧拙/拙巧	隱現
	単双	今昔	軟硬	迎送
	方円	進出	収発	縦横
	分合	来去	収支	左右

乾湿	来往	授受	
古今/今古	裏外	水陸	

以下、表一のタイプをA>B、表二のタイプをA<B、表三のタイプをA?Bと記す。

2 ABの順序を決定する声調的要因

2.1 並列型二音節語と声調の関係

例外とするにはあまりに少なくないこれらの語において、なぜ“*重軽”ではなくて“軽重”なのか、“*易難”ではなくて“難易”なのか。その理由、原因を探ってみることにする。

単音節語である、と言われることの多い中国語であるが、現代中国語においては語彙総数に占める割合はむしろ二音節語のほうが多いと言える。例えば、秦耕司の調査結果によれば、常用語彙約30000語のうち、73%以上が二音節語であるという。⁸⁾ 香坂順一も、現代中国語では複音節語が多く、単音節語との比率は7対3といわれている、と述べている。⁹⁾ 単音節語であることがその主特徴の一つであるかのように考えられている中国語において、このように二音節語がその数で単音節語を圧倒していることは、当然のことながら中国語の音韻変化と無関係ではありえない。例えば、徐通鏘は次のように述べている。¹⁰⁾

中国語の発展の中で、音声のレベルでは濁音の清音化、韻尾の単純化などの原因によって、大量の同音語が出現し、コミュニケーションに大きな面倒と困難をもたらしたために（すなわち言語とコミュニケーションの必要の間に不平衡をもたらしたために）、大量の複合語が生まれた。

また崔希亮は中国語の音韻変化と並列型二音節語の発生を関連づけて、上の徐通鏘の記述をふまえて、並列型二音節語の発生は、このような大きな背景（＝上記の音韻変化）と関係がある、と述べている。¹¹⁾

ところで並列型二音節語 AB (A は前にある形態素, B は後にある形態素) において, A と B の順序を決定する要因は何か, という問題に初めて検討を加えたのは陳愛文・於平の二人である。彼らは“決定並列双音詞的字的因素有兩個: 意義和声調”と結論づけ, 次のように述べている。¹²⁾

ある並列型二音節語において, 二つの字の間の意味関係は次の二つに分かれる。まず一つは対立関係が存在するもので, “主 —— 次”, “先 —— 後” の対立であったり, “積極 —— 消極” の対立であったりする。例えば, “秦漢、好壞、早晚、遲早”のように。もう一つはこのような対立関係がないものである。例えば, “光明、勇敢、黑暗、重大、高深”のように。

もし AB で二字を代表させれば, 前者のような語の二字の関係は $A \neq B$ であり, 後者のような二字の関係は $A \approx B$ である。意味は字序に対して $A \neq B$ 型の語においてのみはたらき, $A \approx B$ 型の語においてははたらかない。さらに並列型二音節語中のそれぞれの字の含義にも二つの異なる状況がある。一つは, 二つの字がそれぞれ元の含義をとどめている場合で, 例えば“党団”は“党+団”に等しく, “夫妻”は“夫+妻”に等しいなどであり, 記号で示せば $AB = A + B$ である。もう一つは, 二つの字の元の含義がすでにあいまいになり, 一つに融合して新たな意味を生じている場合で, 例えば“城市”は“城+市”とイコールではないなどであり, 記号で示せば $AB \neq A + B$ である。以上の状況をまとめれば次の表のようになる。

	$A \neq B$	$A \approx B$
$AB = A + B$	党団 秦漢 夫妻	衣食 門戸
$AB \neq A + B$	好壞 遲早 早晚	光明 勇敢

意味が字序の配列にはたらきうるのは $A \neq B$ 型である。このタイプに属する並列型の語がさらに $AB = A + B$ 型に属していれば, その意味の字序配列に対するはたらきは強制的であり, 声調順序のはたらきを圧倒する。例えば“党団”はその例である。もし, ある並列型の語が $A \neq B$ 型に属し, さらに $AB \neq A + B$ 型に属し

ていれば、その意味のはたらきは存在はするが非強制的であり、声調のはたらきには及ばないことが多く、一般には声調によって順序が決定され（例えば“早晚、遅早；生死、死活”）、ごく少数は意味によって決定される（例えば“大小”）。非強制的な意味は二つの字が同じ声調である場合においてのみ十分にはたらく（例えば“高低、来回”など）。A≈B型の並列語は、意味のはたらきはもとより問題にはならず、声調の順序によってのみ配列され、二つの字が同じ声調であれば、意味、声調ともにはたらかず、その配列順序の原因は“約定俗成”にのみ帰するものである。以上の状況をまとめれば次の表のようになる。

意義作用		声調作用	
		二字不同声調	二字同声調
A ≠ B	AB = A + B	意義決定字序	意義決定字序
	AB ≠ A + B	声調決定字序占多数	意義決定字序
A ≈ B	AB = A + B	声調決定字序	約定俗成（意義声調都 不起作用）
	AB ≠ A + B	声調決定字序	約定俗成（同上）

すなわち並列型二音節語 AB における A および B の順序の決定には、A ≠ B 型では主に AB の意味がその要因としてはたらき、A ≈ B 型では主に声調がその要因としてはたらいていることになる。彼らの言う声調は、中古音の声調と現代音の声調の両方が考慮されている。¹³⁾ 彼らはまた反義並列型二音節語の形態素の順序と声調の関わりについても若干ふれており、

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 早晚：遅早 | 公母：雌雄 | 勝敗：輸贏 | 生死：死活 | 聚散：離合 |
| 快慢：緩急 | 主客：賓主 | 表裏：裏外 | 収支：出納 | 増減：損益 |
| 貴賤：貧富 | 高低：低昂 | 甘苦：苦樂 | 親疎：疎密 | 炎涼：冷熱 |
| 褒貶：毀譽 | | | | |

の16組の順序配列の原因は声調の順序に基づくと解釈すれば明らかだと述べている。¹⁴⁾

この研究をふまえて、崔希亮はこの問題に対して次のような解答を提案している。¹⁵⁾

全体的に見て、声調が形態素の順序に影響するという傾向は確かに存在する。このことは単に並列型二音節語に適合するのみならず、すべての二音節語に適合するが、この結論にはいくらか改造を加えなければならない。

そして彼は「平仄」という観点に着目し、「中国語の二音節語は仄声で終わる構造モデルが多数を占める」ことに気がつき、「二音節語中の平声字と仄声字の分布には違いがあり、この違いは語構成における声調要素のはたらきを体現している」という結論に到達するのである。

2.2 反義並列型二音節語と声調の関係

以上の研究によって、反義並列型二音節語 AB における A と B の順序を決定する要因として、意味の他に声調をも考慮に入れる必要があることは明らかである。¹⁶⁾ 湯廷池の研究はすぐれた研究であるが、そこに欠けているのはまさにこの観点なのである。先に表二、表三に掲げた A < B および A ? B と思われる例について、A と B がそれぞれどのような声調面の特徴をもっているか、まず平仄という点から検討してみよう。

表四

賓主—平仄	呼吸—平仄	難易—平仄	吞吐—平仄
遲早—平仄	今昔—平仄	偏正—平仄	文武—平仄
分合—平仄	来去—平仄	輕重—平仄	稀密—平仄
乾湿—平仄	来往—平仄	疎密—平仄	鹵淡—平仄
寒熱—平仄	矛盾—平仄	収斂—平仄	虚実—平仄
横豎—平仄	南北—平仄	松緊—平仄	迎送—平仄

次に表一に掲げた語を平仄の種類によって分類してみると次表のようになる。

表五

平平	安危 存亡 恩仇 浮沈	剛柔 高低 公私 官民	官私 開闔 親疎 榮枯	輸贏 新陳 興亡
仄仄	表裏 大小 得失 動靜 俯仰 貴賤 好呆	好壞 厚薄 進退 快慢 利害 胖瘦 起落	取捨 日夜 善惡 賞罰 上下 勝敗 勝負	是否 叔伯 遠近 早晚 漲落 正負 主客
平仄	明暗 長短 成敗 粗細 多寡 多少 肥瘦 甘苦 高矮	紅白 寬窄 男女 濃淡 平仄 前後 強弱 榮辱 山谷	深淺 伸縮 昇降 生死 施受 先後 香臭 詳略 新旧	優劣 增減 張弛 朝夕 真假 中外
仄平	愛憎 吉凶	盛衰 始終	是非 有無	

これら二表の語の AB の順序を決定する要因を説明するために、次の仮説を立ててみる。

仮説 [1]

I : ABの平仄が「平平、仄仄、仄平」であれば、意味が順序を決定し、
A > Bの順序になる。

II : ABの平仄が「平仄」であれば、声調が順序を決定し、平声が前、仄
声が後になる。

先に述べたように譚達人も AB の順序決定に声調が関与していることを指摘しているが、譚の言う“調序”とは普通話の調値体系を基準とする「陰平—陽平—上声—入声」の順序であり、“安危、悲喜、甥舅”などはこの“調序”に符合すると考えるのである。そしてこの順序に合わない“死活、厚薄”などは中古音の声調の「上声—入声」「去声—入声」に基づいて声調順序に符合すると考えるのである。¹⁷⁾しかしこの考え方の問題点は普通話の声調を基準とするところにある。例えば“甥舅”は早くも『詩経』に見える語であるが、このような古い語の成り立ちを考える場合に現代音の声調をモノサシにすることはほとんど意味がない。つまり“甥舅”が現代音の声調順序に合っているのは結果であっても原因ではないのである。さらに譚達人は、

高低	深淺	——	輕重	喜怒	休戚	——	憂喜	悲喜
旦夕	早晚	——	遲早	貴賤	——	貧富	窮富	
勝負	勝敗	——	輸贏	主客	——	賓主		
褒貶	賞罰	——	毀譽	好壞	——	否泰		

のような例を挙げて、これらの例語の対比は一定程度において“義序”の作用が“調序”の作用よりも小さいことを説明している、と述べているが、¹⁸⁾ この説明だけでは「一定程度」の範囲がはっきりしない。

次に上の仮説に従って湯廷池の挙例の問題点を検討してみよう。

まず湯廷池論文20頁の注14に挙げられている“輕重、冷熱、冷暖、早晚”のうち、“輕重”は上の仮説IIによって説明される。“早晚”は筆者の考えではA > B型であり、ことさら例外とする必要は感じられない。“冷熱”、“冷暖”については後述する。23頁注20に挙げられている“貧富”は『常用構詞字典』『現代漢語詞典』および

『中日大辞典』にも収録されていない語であるが,¹⁹⁾ “貧富”であって“*富貧”でない理由はやはり上の仮説IIで説明される。25頁で(十四)“軟”は前, “硬”は後, の例に“虚実”を挙げている。この順序決定の要因を意味に求め, “虚”を“軟”, “実”を“硬”とするのは, 牽強付会の感を免れないように思う。“虚実”であって“*実虚”でないのもやはり上の仮説IIで説明される。また26頁注27で, “呼吸”を(十五)“裏”は前, “外”は後, の例外と考えているが, “呼吸”であって“*吸呼”でないのもやはり上の仮説IIで説明がつくのである。

崔希亮は並列型二音節語 AB の A と B の順序決定には, 自然のオーダー (秩序), 社会のオーダーに対する人間の認識が反映されていると考え, 例えば中国語では方位の認識に経線を基準とし, 英語では緯線を基準とするとして, 次のような対照表を掲げている。²⁰⁾

中国語	英語
“東南”	south east
“西南”	south west
“東北”	north east
“西北”	north west

この考えは一応説得力をもつものであるが, しかし, 英語では north and south と言ひ, 中国語では“南北”と言ふ理由は説明できないのではないか。“南北”であって“*北南”でないのはやはり上の仮説IIと関わりがあると筆者には思えるのである。“東北”, “西北”も「平仄」である。もちろん“東南”, “西南”については仮説 [1] に合うとしても“東、西”>“南、北”という意味の優先度を認めざるをえない。これについては後述する。さらに崔希亮は「われわれは思考の過程において, 時間の問題を考える場合には, 必ず“先古後今”“先前再後”で, 時間の流れの順序に従って表現する。もちろん“遅早”のような例外もある。」と述べているが,²¹⁾ 先に指摘したように“遅早”の順序は平仄によって決定されているのであって決して例外ではないのである。さらに崔のこの説明では“今昔”ではなく“昔今”でなくてはならないはずである。“今昔”の順序もまた平仄によって決定されていると考

えられるのである。崔希亮はさらに「音声，意味以外にも“約定俗成”がある。方位において“表裏”と“内外”は出発点が異なり，構造の順序も異なる。われわれは“從裏到外”と言うが認識の出発点は“裏”である。“由表及裏”と言うが認識の出発点は“表”である。」と述べているが，²²⁾ “從裏到外”の“裏”と“由表及裏”の“裏”は意味が異なることを見過ぎてしているのではないか。前者の“裏”はウチであり，後者の“裏”はウラである。意味上の優先がウチソトではウチ>ソトであり，オモテウラではオモテ>ウラであると考えれば“表裏”は例外ではなくなるのである。

しかしながら，先の仮説 [1] I II ですべての反義並列型音節語 AB の順序が説明できるわけではない。例えば次に掲げる語はそうである。

表六

凹凸	旱澇	内外	損益
彼此	緩急	巧拙／拙巧	問答／答問
出納	禍福	曲直	陰陽
出入	借貸	軟硬	隱現
雌雄	進出	収支	縦横
単双	冷暖	授受	左右
方円	冷熱	輸贏	
今古／古今	裏外	水陸	
黑白	買売	死活	

(但し，ウチ>ソトという意味上の優先度が適用されるならば“裏外”，“内外”の二つは除外される)

これらの AB の順序を説明するために次の仮説を考えてみる。

仮説 [2]

AB の平仄が「仄仄」で，一方が「上声」，一方が「去声」または「入声」

であれば、「上声」が前、「去声・入声」が後になる。

この仮説 [2] が正しければ、上表のうち次の語の AB の順序が説明できる。

旱澇	冷熱	軟硬	損益
緩急	(裏外)	水陸	隠現
禍福	買売	死活	左右

これらのうち、例えば“軟硬”は湯廷池の言うように意味上の優先度がヤワラカイ>カタイと考えられないわけではないが、そうすると“剛柔”が例外となってしまう。また“禍福”は明らかに“禍”<“福”だろうし、“冷熱”もおそらく、冷”<“熱”だろう。さらに“買売”では“買”と“売”のどちらの優先度が高いのか決めがたいし、“左右”も“左”と“右”のどちらかが高いのか決めがたいのではないだろうか。²³⁾ また“旱澇”では“旱”も“澇”も同様に好ましくない意味であり、ABの順序決定の要因を意味上の優先度に求めるのは無理があると言わざるを得ず、声調の順序によると考えたほうが合理的だろう。湯廷池が23頁で例外として挙げている“損益”も声調の順序から見れば例外ではなくなるのである。

3. 結言

以上の考察により、仮説 [1] [2] がかなりの程度まで有効であることが明らかになったが、これらの仮説で説明できないものとして以下の語が残る。

凹凸	彼此	出納	出入	単双
方円	古今/今古	黒白	借貸	進出
冷暖	巧拙/拙巧	曲直	収支	授受
輸贏	叔伯	問答/答問	陰陽	縦横

これらの多くは「平声+平声」「上声+上声」「入声+入声」のような同調連続で

ある。上の例から帰納できる傾向は、平声と平声の連続で陰平と陽平が並ぶ場合には「陰平+陽平」になるということである。例えば「雌雄、方円、輸贏、陰陽、縦横」がそうで、先に問題にした「東南、西南」もこれに該当する。また入声と入声の連続では入声の消失後、陰平になったものが前に来るということである。例えば「出納、黑白、曲直、叔伯」などがそうである。しかし例の数が限られていて一般性を強く主張できるレベルには至らない。さらに「古今/今古」「巧拙/拙巧」「問答/答問」のようにAB、BAの二つの順序があるもの、また「凹凸、彼此、単双、借貸、進出、冷暖、収支、授受」のような同調連続のものについてはさらに考察を加える必要がある。

これらの順序決定の要因をいわゆる「約定俗成」に求めるのは最も安易なやり方ではあるが、それはまた同時に科学的追及を放棄することでもある。そこには必ずなんらかの理由、原因があるはずであるが、現段階ではそれを見出すことができない。今後の課題としたい。

注釈および参考文献

- 1) W.E.Cooper and J.R.Ross (1975), World Order, Papers from the Parasession on Functionalism, Chicago Linguistic Society, pp. 63-111.
- 2) 同上 p. 65-66.
- 3) 湯廷池 (1982) 「国語詞彙学導論：詞彙結構与構詞規律」『漢語詞法句法論集』(1988), pp. 1-28, 台湾学生書局。
- 4) 同上20-26頁参照。
- 5) 譚達人 (1989) 「略論反義相成詞」『語文研究』1989年第1期, pp. 27-33, 語文出版社。
- 6) 傅興嶺・陳章煥主編 (1982) 『常用構詞字典』, 中国人民大学出版社。
- 7) 主に『中日大辞典』(増訂第二版) (1987) 愛知大学中日大辞典編さん処編, 大修館, および張徳鑫 (1986) 「談漢語的“正反詞”」『語言教学与研究』1986年第1期, pp. 90-95, 北京語言学院出版社, を参考にした。なお後者の張論文は本稿で言う並列型二音節語を“正反詞”と名づけて、その表す意味によって分類を行っているが、形態素の順序についてはほとんど言及していない。
- 8) 秦耕司 (1989) 「音節構造・形態素・文字——中国文字改革の行方——」『長崎県立国際経済大学論集』第23巻第2号, pp. 83-134. 105頁参照。

- 9) 香坂順一(1983)『中国語の単語の話——語彙の世界』, 光生館。116頁参照。
- 10) 徐通鏘(1990)「結構的不平衡性和語言演變的原因」『中国語文』1990年第1期, pp. 1-13, 中国社会科学出版社。8頁参照。
- 11) 崔希亮(1990)「並列式双音詞的結構模式」第3回國際漢語教學討論會口頭發表レジュメ, 1頁参照。
- 12) 陳愛文・於平(1979)「並列双音詞的字序」『中国語文』1979年第2期, pp. 101-105, 中国社会科学出版社。102頁参照。
- 13) 同上101-102頁に「声調在歷史上有過幾次大的变化。一個詞如果產生在濁声母和入声消失的年代之前, 应当服從中古声調系統; 如果產生在這個時代之後, 应当服從現代普通話的声調的声調系統。」と述べられている。
- 14) 同上101頁参照。
- 15) 注11) 前掲レジュメ4頁参照。
- 16) 反義並列型二音節語の二つの形態素の間には意味の対立関係の他に, 音声の対立関係もあることは, 香坂(1983)によれば, 何九盈・蔣紹愚『古漢語詞彙講話』82頁以下に指摘されているという。ただし同書は音声の対立関係と二つの形態素の順序の関連についてはなにも言及していない。くわしくは注9) 前掲書21-23頁を参照。
- 17) 注5) 前掲論文27頁参照。
- 18) 同上28頁参照。
- 19) 蔣紹愚が指摘するように, 言語の歴史的発展の過程においてある語の反義語が変化することがある。例えば古代中国語の「粗」↔「精」が現代中国語では「粗」↔「細」になり, 古代中国語の「高」↔「下」が現代語では「高」↔「低」になっているように。「富」の反義語も上古においては「貧」であったが, 中古においては「貧」と「窮」になり, そして現代語においては「貧」は基本的に消失している。蔣紹愚(1989)「關於漢語詞彙系統及其發展變化的幾點想法」『中国語文』1989年第1期, pp. 45-52, 中国社会科学出版社。49頁参照。
- 20) 注11) 前掲レジュメ7頁参照。
- 21) 同上8頁参照。
- 22) 同上8頁参照。
- 23) 『大漢和辞典』によれば, 「左」には「いやしい, あやしい, よこしま」, 「右」には「たつとぶ, たつとい, 大切な」という意味がある。